

顔面神経側頭枝の臨床解剖学的検討

原岡 剛一¹ 岩山 隆寛¹

Goichi Haraoka¹ Takahiro Iwayama¹

神戸大学 美容外科¹

【背景】

美容外科手術において、顔面神経の損傷は最も回避せねばならない合併症の一つであり、その走行の理解は非常に重要である。過去にも報告が散見されるが、その多くが眉毛や耳珠といった軟部組織をメルクマールにしているため、個人差が大きく、正確ではない可能性がある。

【目的】

本検討の目的は、顔面神経側頭枝(以下、側頭枝)の走行を明らかにし、骨性のメルクマールを用いて評価することである。

【方法】

大阪市立大学解剖学教室所有の学生実習用保存屍体21体34側を用いて検討した。耳下腺内で顔面神経本幹を確認した後に側頭枝を同定し、それを順行性に前頭筋まで追跡した。骨性のメルクマールとして眼窩最外側点(以下OLR)と外耳道(以下EC)を選択した。2点を結んだ線を基準線とし、その基準線からOLRを中心に頭側へ15°、30°、45°、60°、90°の放射状の測定線を設定した。各測定線における側頭枝の走行部位を観察した。

【結果】

側頭枝は複数の分枝を有し、それらがネットワークを構成しながら走行している様子が観察された。基準線はほぼ頬骨弓の上縁に一致するが、その測定線ではOLRからEACを100とした場合、 $63.7 \pm 11.2\%$ の領域を走行していた。

【考察】

走行については従来の報告と大きな相違のない結果が得られた。術中のメルクマールとしては『頬骨弓上縁では骨性外眼角と外耳道を結んだ線の中央よりもやや後方よりを走行し、その後徐々に骨性外眼角に接近し、前額部外側では約半分の距離まで接近した』領域を走行していると表現できる。そして側頭枝は必ず複数本存在し、それらがネットワークを構成しながら走行している所見が得られたため、軽微な損傷は許容される可能性がある。